

特別展「災害の歎きと笑い」講演会

日本美術に刻まれた破局と再生

芸術系准教授
水野裕史

1. 災害を描くということ

- ・日本列島は、古来より地震・火災・噴火・洪水などの災害に繰り返し見舞われてきた。
- ・そうした「破局」の只中で、人びとは恐怖や悲嘆を描き残し、やがてそれを祈りや教訓のかたちへと昇華させてきた。

美術とは単なる装飾ではなく、災厄を記憶し、再生を願うための手段でもあったのではないか？

2. 破局の記録—中世絵巻

- ・「北野天神縁起絵巻」承久元年（1219 年）京都・北野天満宮
菅原道真の怨霊によって都が炎上する場面に、火と人びとの混乱が生々しく描かれる。「災い＝天罰」という宗教的意味づけのもと、社会の動揺と感情の記録が刻まれている。
- ・「絵仏師良秀」『宇治拾遺物語』
妻子の残る自宅が焼けるさなか、絵師が「良い見本ができた」と言う逸話。絵師は観察し、痛みを創造へと変える存在として描かれる。

3. 再生の記録—近世の真景図

- ・「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」熊本県・宇土市教育委員会
18 世紀後半、地震被害ののちに制作されたと考えられる。実地の写生ではなく、失われた風景を文献に基づき再構成した作品。
- ・「領内名勝図巻」永青文庫
死者数 15,000 人以上とされる寛政 4 年（1792）にあった島原大変肥後迷惑の翌年に制作された絵巻。全 15 巻（第 13 巻が欠損）。肥後国の名勝が網羅的に描かれている。藩主細川斉茲が領内を巡検した際に名勝に感動し、絵師に写生を命じた。

4. 破局と再生の連鎖

- ・江戸時代後期の真景図には、災害後の風景を理想化し記録する傾向がみられる。
- ・単なる自然描写にとどまらず、地域の復興過程や為政者の統治理念を象徴したのではないか。

おわりに

- ・災害の中で、美術は何を対象としてきたのか？

参考文献

林進『日本近世絵画の図像学—趣向と深意』八木書店、2000 年
鶴岡真弓『江戸期実景図の研究』中央公論美術出版、2012 年